

英米文学から読む自然と人間 ()

鈴木元子

Nature and a Human Creature in English and American Literature

(I)

SUZUKI, Motoko

1. 英米文学とは

自然と人間については様々な視点から考察することができますが、今回は聖書と英米文学の三作品から読みとっていきたいと思います。

聖書や英米文学といってもそれは幅の広いものです。英文学とは「イギリスの文学」¹のことですが、それはいつ頃から始まるのでしょうか。まず、「古英語文学」(Old English Literature)の時代(約 650-1150 年)があります。代表的な作品として、叙事詩『ベオウルフ』(Beowulf, 8 世紀前半)を挙げるができます。

次は、「中世英語文学」(Middle English Literature)の時代(1150-1500 年)で、代表者はジェフリィ・チョーサー(Geoffrey Chaucer, 1340-1400)です。彼の『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales, 1387-1400 執筆)は、当時ヨーロッパに流布していた物語を集大成したもので、カンタベリーに詣でる 29 人のあらゆる階層・職業の巡礼者たちが話を語ります。特に「バースの女房」の勇ましい女権宣言などは現代読んでも活気に満ちたものです。

さらに、1558 年から 1603 年にかけては、「英国ルネッサンスとエリザベス一世時代」(The English Renaissance and the Elizabethan Age)と呼ばれている時代です。スペンサー(Edmund Spenser, 1552-99)の詩の感覚的な優雅さに始まり、大学才人連(University Wits)の脚本による論争、さらには偉大なるシェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)を生み、劇詩形態の完成をみる時

¹ 『大辞林』(三省堂、1988 年、1989 年)

代です。

次の 1603 年から 1700 年までの「第十七世紀」は、エリザベス一世時代の楽観・肯定・自己拡大の風潮に対する反動として、人間の宿命や死と真正面から取り組む自己内省や陰鬱な瞑想を語る作品が多く現れました。宗教文学が発展したのもこの頃で、バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(The Pilgrim's Progress, 1678; 1684)や、ミルトン(John Milton, 1608-74)の大作『失樂園』(Paradise Lost, 1667)が世に問われました。

「第十八世紀」は英国近代市民社会成立の時代で、合理主義・現実主義が支配する理性と散文の時代となりました。新しいジャーナリズムが起こり、随筆を載せた新聞、時流批評や文学論の展開、アディソンとスティールの文学新聞「スペクテイター」(The Spectator, 1711-12; 1714)も発刊され、ポウプ(Alexander Pope, 1688-1744)²やジョンソン博士(Samuel Johnson, 1709-84)たちの支配する文学社交グループも現れ、小説が誕生した時代でもあります。

次の 1798 年から 1832 年が、「ロマン主義」(Romanticism)の時代です。これは、一言でいえば想像力の解放を意味します。18 世紀の枠にはまった規約づくめの表現法に対して、個性の発現が主張されました。人工的な表現枠から人の心を解放し、精細な自然観察と描写が人々の関心を惹きつけました。イギリス・ロマン派の時代は、ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)とコウルリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)共著の『叙情歌謡集』(Lyrical Ballads, 1798)が発行された 1798 年に始まり、スコット(Sir Walter Scott, 1771-1832)の死亡した 1832 年に終焉するとされています。スコットはスコットランドの伝説や歴史に基づいて、物語詩や長編小説を書いた作家です。

イギリス文学史は、その後 1832 年から 1901 年までの「ヴィクトリア女王時代」(The Victorian Age)、「第十九世紀末及び第二十世紀初頭」、そして「現代」というふうに区分されています。

それに対して、アメリカ文学の歴史はたいへん短く、ヨーロッパの伝統から離れて独自の文学を持つのも、19 世紀半ばになってからのことです。アメリカ文学史の時代区分については、(1)「植民地時代の文学」(1607-1774)[Edwards の時代]、(2)「アメリカ文学の独立」(1775-1829)[Franklin と Channing の時代]、(3)「ロマンティシズム」(1830-1860)[Emerson の時代]、(4)「南北戦争期の文学」(1861-1865)[Stowe 夫人の時代]、(5)「リアリズムと自然主義小説」(1866-1914)[Mark Twain と Dreiser の時代]、(6)「1920 年代の文学」、(7)「1930 年代の文学」、(8)「第二次世界大戦後の文学」と分けることができます。

時代別の特徴は、(1)厳格なピューリタン精神、(2)Yankeeism という科学的合

² 特に所謂「英雄詩体二行連句」(heroic couplet) 各行 10 音節、2 行ずつ行末で韻をふむもの を中心とする第 18 世紀詩法伝統の中心人物と考えられている。

理主義・実利主義精神、(3)人間解放のルネサンス、(4)奴隷解放運動、(5)地方色文学とリアリズム文学の隆盛、(6)19世紀モラルを拒否した Lost Generation の時代、(7)不安と危機の時代、(8)南部文学、黒人作家やユダヤ系作家、女流作家が登場し、少数民族の文学も生まれてくる現代へと流れてきています。すなわち、アメリカ文学の特徴は、第一にピューリタンのロマン主義と開拓者精神が色濃く影響していること、第二に常に対ヨーロッパ意識が働いていること、第三に社会批判的態度が鮮明でリアリズム文学が隆盛になったこと、第四に南部文学が重要な地位を占めてきたことなどです。

2. 英米文学の基^{もとい}である聖書

英米文学史を概観しましたが、これらの英語で書かれた文学作品に、言語・思想として聖書が多大な影響を及ぼしてきたことを見逃すわけにはいきません。

では、聖書はどのくらい古いものなのでしょうか。旧約聖書ですと、「ユダヤ教団では最も重要な<律法>は前4世紀中に、続いて<預言者>が前3世紀中ごろまでに正典化され、<諸書>は一部の書物についての議論を残しつつ前2世紀中にはだいたい公認された」³ そうです。

中世のヨーロッパ各国教会において、公認のラテン語訳聖書《ウルガタ》が用いられていましたが、そのうち次第に近代各国語に翻訳しようという動きが出てきます。イギリスにおいても、14世紀末ウィクリフの提唱のもとに、全訳《ウィクリフ派英訳聖書》(1385年頃、改訳は1395年頃)が完成します。ところが、その完成後直ちに教会当局の激しい弾圧を受け、さらには印刷機のまだない時代であったために、広く流布するには至りませんでした。この後、宗教改革を経て、16世紀中頃にイギリスでは《ティンダル訳新約聖書》(1624年)をはじめ、約10種に及ぶ英訳聖書が相次いで出版されました⁴。

そして、これらの英訳聖書の頂点に立つのが、1611年刊行の《欽定訳聖書》(King James Version)⁵です。これは、「シェークスピアの英語と並んで近代英語

³ 山折哲雄監修『世界宗教大事典』(平凡社、1991年)1070ページ。さらに続けて、「ヘブライ原典に属する書物がすべて最終的に正典として公認されたのは、後70-90年にヤムニア(ヤブネ)で開かれたラビたちの会議においてであったと思われる」。

⁴ プロテスタント系では、《ガバデル訳聖書》(1535年)、《大聖書》(1539年)、《ジュネーブ聖書》(1560年)、《主教聖書》(1568年)などがあり、唯一のカトリック系訳としては、《ルームズ・ドゥエー聖書》(新約1582年、完訳1610年)があった。

⁵ この《欽定訳聖書》は、ジェームズ1世の命を受けて、当代を代表する五十数名の聖職者・学者が周到な計画のもとに、《ティンダル訳》以来の既刊英訳聖書の長を採り短を補って訳出した。(『世界宗教大事典』1073ページ参照。)

の性格を決定したと評される名訳であり、英米人の精神・思想・感情生活に大きな影響を与えた」⁶といわれています。その簡素で、古典的な魅力のある文体の故に、出版より3世紀半を過ぎた今日においても、英米人に広く愛誦されています。

3. 聖書の自然観

このように、欧米人たちの思想形成に影響を与え、現在でも人々の日常生活の指針になっている聖書ですが、今日では急激な社会変化により、これまでの聖書解釈では対応しきれない部分が目に付くようになりました。具体的には、性差別や人権、平和の問題、そしてその自然観についてですが、聖書の読み直しがされています。

聖書というと、人間の自然征服の思想的典拠とさえ見られる向きがあります。それは、天地創造物語（旧約聖書冒頭にある）における神の命令が誤読・曲解されてきたからに他なりません。また、これまでキリスト教界で自然について語ることがタブー視されてきたことにも原因があります。自然について何か言及しようとする、それは「汎神論」と異端視され、切り捨てられてきました。しかし、創世記には次のように記してあります。

And God saw every thing that he had made, and, behold, *it was very good.* (*Genesis* 1:31, KJV)⁷

つまり、全被造物が神の目に叶って「良かった」というのです。

... for he maketh his sun to rise on the evil and on the good, and sendeth rain on the just and on the unjust. (*Matthew* 5:44 - 45)

そして、その自然の恵みは、全ての人間に、悪人にも善人にも注がれていることを新約聖書のマタイ伝は告知してきました。

For the invisible things of him from the creation of the world are clearly seen, being understood by the things that are made, *even his eternal power and God-head; so that they are without excuse:*
(*Romans* 1:20)

⁶ 『世界宗教大事典』1073ページ。

⁷ *The Holy Bible, King James Version* (1611). 以後英訳聖書からの引用は欽定訳を用いる。

そこで、ローマ書を書いたパウロは、キリストの福音をまだ聞いたことのないどんな人間であっても、自然の被造物を見ることで神を見ることが可能であり、神を知ることができる、被造物の背後にこそ造り主の存在があると説いています。このことは、日本のような非キリスト教国の人たちには喜ばしい知らせといえるでしょう。この観点から、仏教との対話も容易になるでしょう。

このような自然観が聖書の中に説かれているにもかかわらず、それ以上に強烈に人々の心に焼き付けられた神の言葉がありました。

And God said, Let us make man in our image, after our likeness: and let them have dominion over the fish of the sea, and over the fowl of the air, and over the cattle, and over all the earth, and over every creeping thing that creepeth upon the earth. So God created man in his *own* image, in the image of God created he him; male and female created he them. And God blessed them, and God said unto them, Be fruitful, and multiply, and replenish the earth, and subdue it: and have dominion over the fish of the sea, and over the fowl of the air, and over every living thing that moveth upon the earth. (*Genesis 1:26-28*)

神の 6 日間に渡る天地創造において、最後に創造されたのが人間であったことから、自然の全て（全被造物）が人間のために造られたと解釈され、さらには 1 章 28 節の「支配せよ」（“have dominion over”）の命令が、人間の自然征服を正当化する根拠として機能してしまったのです。

確かに、昔、自然は人間にとって命をも奪われかねない脅威の対象でありました。自然を生き延びるために技術を発展させてきたのが人間の歴史ともいえましょう。それが次第に、自然の恵みや豊かさを享受するための科学技術の発達に終わらず、人間の欲望を満たすために自然破壊が平気で行なわれるという事態に至りました。

創世記 1 章 26 節、28 節の記述が人間と他の被造物とを分離させる結果となり、それが延いては全被造物に対して人間が「神」のように振る舞う行為となりました。自然環境が危機に直面していることに気づいた一握りの人たちが、とうとう声を上げ始めました。

分かり易い例として、たとえばアメリカのバッファロー絶滅の話をしたと思います。

バッファロー、正確にはアメリカバイソンは、かつてインディアンたちの生活源でした。インディアンたちはその肉を食料にし、皮は靴や服に、さらに住居

にさえなりました。角も、骨も、それぞれの特徴を生かした道具になり、武器にもなりました。インディアンたちは、確かにバイソンを捕りましたが、捕獲しすぎるということはありませんでした。バイソンとインディアンとの間には、暗黙の内にいわゆる平和的共存関係が成立していたからです。シルヴァーバーグという人の話によれば、南北戦争の直後、アメリカにはなお 6 千万頭のバイソンがいたそうです。しかし、白人がインディアンを支配下に置き、その土地を奪い取ろうと決めた時に、彼らはバイソンまでせん滅することを考え出したといいます。1871 年を皮切りに、プロのハンターたちがバイソンを根絶やしにするために、ぞくぞくと西に向かいました。何千名ものハンターが西部平原に夜営し、各人が一日に 50 ないし 60 頭のバイソンを射殺していきました。皮も肉も無益に打ち捨てられ、広大な平原にバイソンの腐乱死体が散乱したといえます。1889 年に議会は公式に虐殺を止めさせましたが、最終的に生き残ったのは 89 頭だけでした。平原にいた 6 千万頭のうち、生き残ったのはたったこれだけでした。つまり、20 年足らずの間に、まるまる 6 千万頭が何の意味もなく殺されたこととなります。今日、保護されたバイソンの子孫たちは動物園で見ることができます⁸。

この出来事は、白人とインディアンの自然観の違いを明確に示してくれると思います。たとえば、このような歴史的出来事に対するキリスト教界側の反省から、自然観について聖書はどう語っているのかに注意が向けられるようになりました。そしてこの「支配せよ」も、人間は被造物の「世話係」「担当者」「信託された者」(スチュワード)、神から大切な物を預かっている「管理人」であると解釈するのが学問的に正しいとされるようになりました。

創世記 1 章 28 節の英語訳も、そこで次のように変化しました。

... : and *have dominion* over the fish of the sea, and over the fowl of the air, and over every living thing that moveth upon the earth. (KJV)

... and *have dominion* over the fish of the sea and over the birds of the air and over every living thing that moves upon the earth. (Revised Standard Version)⁹

⁸ 高木仁三郎『いま自然をどうみるか』(増補新版)(白水社、1998年)192-4頁から抜粋要約。

⁹ *The Holy Bible*, Revised Standard Version, Translated from the original tongues being the version set forth A.D.1611, revised A.D.1881-1885 and A.D.1901, compared with the most ancient authorities and revised A.D.1952. (W.M. Collins Sons & Co. Ltd. for the Bible Societies) 「《欽定訳》の伝統を可能なかぎり尊重しつつ、これに必要最小限の現代化を試みたアメリカの《改訂標準訳聖書》(新約 1946 年、完訳 1952 - 57 年)」(『世界宗教

I am *putting you in charge of* the fish, the birds, and all the wild animals. (Today's English Version)¹⁰

(斜字体：筆者)

次に、自然の中の人間について聖書がどう語っているかについて見てみたいと思います。

創世記 2 章を見ると、「主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。……また土を耕す人もいなかった。」(創世記 2:4 - 5) とあります。そこで、神は人を創造されたというのです。人間が造られると、まず、「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされ」(創世記 2:15)しました。

この部分は、英訳聖書に次のように記されています。

And the LORD God took the man, and put him into the garden of Eden to *dress* it and to keep it. (KJV)

The LORD God took the man and put him in the garden of Eden to *till* it and keep it. (RSV)

Then the LORD God placed the man in the Garden of Eden to *cultivate* it and guard it. (TEV)

(斜字体：筆者)

このように、人間が土を耕すために造られたということがはっきりと英訳されています。ところが、この聖句はそれほど有名ではないのです。なぜでしょうか。分かりませんが、前述の「支配せよ」の方が人々に安易に受け入れられ、利用されたということなのでしょう。

英語で “cultivate one's mind” というように、“cultivate” には、「心を耕す、才能を伸ばす」という意味があります。語源のラテン語の “cult” に、“tilling, care, refinement, worship” 等の意味があるからでしょう。そこで、土地を耕し、さらには自分の心や魂を耕し、世話をし、礼拝し、成長していくのが人間の生きる目的であると聖書から読むことができます。そこで、大地や自然（個人の

大事典』1073ページ)

¹⁰ *Good News Bible, Today's English Version* (ed.2) (New York: American Bible Society, 1966, 1971, 1976, 1992)

所有物とは考えずに、天からの預り物との認識の下に)の世話をし、守っていく者、すなわち地球の庭師が人間ということになります。

神は天地を造られましたが、全てを調和させながら建て上げていくのが神の意志です¹¹。それに対して、悪魔は神の意志に敵対することを目的とする存在ですから、神が“creator”であるのに対し、“destroyer”(破壊者、大量殺戮者)として活動します。

このことを念頭において地球の自然環境問題について考えてみますと、「まことに、人間以外の被造物にとっては、自然の生態系を汚染し破壊する人間こそ『悪魔的、破壊的存在』(F・エールカー)なのである」¹²ということがよく分かります。

しかも、この指摘は約2千年も以前の**新約聖書**の中に見出すことができます。

. . . because the creature itself also shall be delivered from the bondage of corruption into the glorious liberty of the children of God. For we know that the whole creation groaneth and travaileth in pain together until now. And not only *they*, but ourselves also, which have the first-fruits of the Spirit, even we ourselves groan within ourselves, waiting for the adoption, *to wit*, the redemption of our body. (Romans 8:21 - 23)

声の出ない自然がうめき、産みの苦しみを味わっています。まさに現代を予言している言葉です。さらに、自然は人間に向けて造られたのではなく、自然もまた人間同様、神(霊)に向けて造られたものであると告げています。すなわち、被造物もまた贖われるのを待望しているというのです。

For that which befalleth the sons of men befalleth beasts; even one thing befalleth them: as the one dieth, so dieth the other; yea, they have all one breath; so that a man hath no preeminence above a beast: for all is vanity. All go unto one place; all are of the dust, and all turn to dust again. Who knoweth the spirit of man that goeth upward, and the spirit of the beast that goeth downward to the earth? (*Ecclesiastes* 3:19 - 21)

¹¹ パウロも「壊すためではなく造り上げるために」(コリントの信徒への手紙二 13:10)と書いています。

¹² 富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』(新教出版社、1993年、1996年)

コヘレトは、人間の体も動物の体も「塵から成り、塵に戻る」といっています。これは、生態学の洞察と全く一致するものです。人間は今一度謙虚に土から造られている自らの有限性に思いを馳せ、しかしながらまた神の息吹により生かされている者であることをも認識して、神の思いを我が思いとし、託されたこの地球を平和に預かっていくべきであると読むことができます。

(続)

(2000 年 2 月 29 日 受理)